

弥生時代～古墳時代の木製履物について

本 村 充 保

目次

I. はじめに	53
II. 木製履物に対する従来の評価	53
III. 事例の様相	54
IV. 事例の検討	60
V. 板状履物の用途	64
VI. まとめ	66

論文要旨

服飾具に分類される木製履物の初源期は、下駄が古墳時代中期に出現して以降のことと考えられる。一方で、農具に分類される田下駄は、弥生時代前期には存在することが知られている。木製履物の出現は、少なくとも弥生時代に遡ることが確実である。

本稿で扱う「板状履物」も、田下駄同様、弥生時代前期に遡る木製履物と考えられるが、出土事例が僅少であること、出土地域の偏在性が顕著であることから、一般的に周知された遺物ではない。このため、形態的特徴、分布・変遷の様相、用途など不明な点が多い。

本稿は、「板状履物」の出土事例を整理することを通じて、その様相を明らかにし、日本の履物史における存在意義を検討することを目的とする。全国的な資料集積の結果、29遺跡42例の事例を確認した。その検討から「板状履物」は、弥生時代前期～古墳時代後期まで存続し、関東～北部九州に分布することが判明した。従来から北部九州に偏在することが指摘されていたが、北部九州のほか、日本海側の各地に事例が集中することも明らかにした。また、形態的には9形式に分類でき、北部九州とその他の地域では、主体となる形式が異なることを指摘した。

用途に関しては、田下駄の一種とする見解が示されているが、北部九州の事例は、他の農具との共伴事例が多いのに対し、それ以外の地域では、祭祀遺物との共伴事例が顕著に見られることから、農具ではなく、祭祀具に分類すべき履物である可能性が高いと推定した。「板状履物」には使用痕が明瞭に残るものが含まれることから、形代ではなく、実用品であり、祭祀行為に伴う装束の一部であったのではないかと推定した。

初期の下駄も祭祀具と共伴する事例が多く、「板状履物」は、祭祀具の一種としての性格を強く帯びた履物であると意義づけられる。

本村 充保（もとむら みつやす）

奈良県立橿原考古学研究所 指導研究員

I. はじめに

日本において服飾具に分類される木製の履物がみられるようになるのは、古墳時代中期に下駄が出現して以降のことであると考えられる¹⁾。弥生時代については、『魏志倭人伝』²⁾の「皆徒跣（皆、裸足である。）」という記述にみられるように、基本的に裸足であったというのが一般的な理解といえるだろう。事実、考古資料としては、古墳時代前期以前に遡る木製の履物が服飾具として報告された事例はない。

しかしそれは、古墳時代前期以前に遡る木製の履物が存在しないという意味ではない。そのような木製の履物といえば、多くの人が田下駄を思い浮かべることだろう。田下駄は農具に分類される履物であり、弥生時代前期以降、稲作の開始とともに大陸から伝来したと考えられている。田下駄は、考古資料としての出土事例も多く、鋤・鍬と並んで、日本における代表的な農具の一つとして周知されている。しかし、本稿で取り扱おうとする「木製履物」とは、田下駄のことではない³⁾。その「木製履物」は、出土事例が非常に少なく、地域的にも北部九州に偏在する傾向が強いことから、必ずしも周知されているわけではなく、具体的様相は不明な点が多い。用途についても、田下駄の一種とする説が提示されているものの、その見解もまた、必ずしも定着しているわけではない。

そこで本稿では、弥生時代～古墳時代にみられる「木製履物」の様相を検討し、日本の履物史の中でどのように位置づけることができるのかを考えてみたい。

II. 木製履物に対する従来の評価

前章で述べたように、本稿では弥生時代～古墳時代にみられる「木製履物」を素材として、その様相を検討することを目的としている。ただ、「木製履物」という単語は、その漢字が示す通り、「木で製作された履物」という一般名詞として使用されることが通常の用法であり、特定の遺物を指す用語としては適切ではない。本稿で取り扱う「木製履物」は、「木製の履物」であるという意味においては、「下駄」や古代の「木沓」などとともに木製履物の一種といえる。しかし、「下駄」や「木沓」とは、使用された時期や履物としての構造などが異なるため、明確に区別できる別の用語を与える必要がある。

後述するように、本稿で扱う「木製履物」は、若干の形態差はあるものの、板状の底板をもち、縁部が小さく立ち上がるという形状を呈する。また、紐通し孔と考えられる小孔をもつものが多い。このような特徴は、被甲部をもたない開放性履物である下駄や田下駄に類似するもので、被甲部をもつ閉塞性履物である木沓とは明確に構造が異なる。そこで本稿では、開放性履物の一種であるという点を重視して、「板状履物」と呼称したい。ただし、この名称は形態的特徴に依拠したもので、「下駄」や「田下駄」、「木沓」のように、一般的に周知された履物の名称と比べて異質であることは否めない。従って、あくまでも一時的な呼称として使用し、将来的には適切な名称に変更することが望ましいと考えている。

板状履物は、従来から指摘されているように、出土事例が非常に少ないうえ、分布地域が北部九州に偏在するという資料的制約から、積極的に具体的様相やその意義が論じられたことはほとんどない。このような状況にあって、ほぼ唯一の論考といえるのが比佐陽一郎氏の「木製履物雑考」⁴⁾である。比佐氏の論考では、考古資料としての板状履物にみられる形態的特徴や時間的・空間的傾向の分析はもとより、民具資料を援用して、用途の復元を試みるなど、最初に明らかにされるべき諸課題について精力的に論じられており、基礎的研究として高く評価できる。そこで少し長くなるが、比佐氏の見解を紹介し、当該期の板状履物がどのように位置づけられているのかをみていくこととする⁵⁾。

比佐氏は、板状履物の形態的・構造的特徴を「足の平面形を一回り大きくした形の厚めの板材を周囲を残して彫り窪め、側面に紐を通すためと考えられる孔をあげ、更に地面と接する面には何らかの滑り止め状加工を施しているものもある。下駄のような鼻緒や高い歯は持たない。また爪先を覆う部分もなく、後の時代に見られる「沓」とも構造的に異なる⁶⁾。」と規定している。その上で、このような特徴をもつ板状履物の出土事例は、全国で12遺跡15例があるとする。時期的には弥生時代前期後半～古墳時代後期に限られ、地域的には北部九州における集中度が際立つことを指摘している。さらに、紐通し孔と裏面（接地面）の形態をもとに、それぞれ3類（紐通し孔：Ⅰ～Ⅲ、裏面の形状：1～3）に分類し、その組合せと実際の出土事例との関係をもとに、a～h類の

8つに分類している。しかし、比佐氏自身も述べているように、出土事例が少ないため、「一団体一型式」という状況を呈しており、明確な評価に結びつけるにはいたらなかった。

ただし、爪先の覆いや鼻緒がないことから、歩行用ではなく作業用と考えられること、北部九州に偏在することから、稲作との関係で捉えられ、大陸か半島から伝来したものであるとした。また、板状履物の用途に関しては、民具にみられる板形田下駄（ナンバ）との類似性を根拠として、田下駄の一種であるとの見解を示している。

比佐氏の論文は、絶対的な資料不足が否めない状況にあって、考古学的・民俗学的検討を通じて結論が導き出されており、基礎的研究として大きな意義があったといえる。しかし、一般的に「板状履物＝農具（田下駄）」であるという前提に立ち、十分な資料的裏付けのないまま結論が導き出されているという印象を強く受けるものとなっている。それは板状履物の型式分類を試みながら、分類案が結論とは何の関係もないという点に端的に表れている。さらに、「板状履物＝農具（田下駄）」であるという前提には、いくつかの点で看過しがたい疑問がある。問題点については後述するが、少なくとも、その結論については再考の余地があるといえる。

Ⅲ. 事例の様相

比佐氏が論文を発表してから二十年が経過し、新出資料の確認などにより、出土事例は大幅に増加した。管見による限り、板状履物の出土事例は、29 遺跡 42 例を数える。以下、全ての事例を紹介する⁷⁾(図 1～図 3・表 1)。なお、時期はいずれも報告書の記載による。また、各事例の法量のうち、() なしの計測値は外形、() 付きの計測値は内形を表し、残存値の場合、外形値のみを示した。

1. 福岡県辻田遺跡⁸⁾

大溝から出土し、弥生時代後期とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

残存長 17.8cm、幅 12.2cm (9.6cm)、高さ 4.5cm を測る。平面形は丸形で、側面および底面に紐通し孔は確認できない。外底面の前部にスパイク状の突起が 2 つ残存する。材はクリである。なお、報告書では盤と報告されて

いるが、比佐氏は履物の可能性が高いとされている。本事例が盤であるのか、履物であるのかは判断が分かれるところではあるが、本稿では比佐氏の見解に従う。

2. 福岡県拾六町ツイジ遺跡⁹⁾

第 3 号土壌下層から出土し、弥生時代前期後半～末とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。遺構の性格は、水利施設であるとされている。

残存長 17.5cm、幅 11.5cm (9.6cm)、高さ 3.6cm を測る。平面形は丸形で、左側面に 3 孔、右側面に 2 孔の紐通し孔が穿孔される。側面の紐通し孔は、正対していない。外底面に加工はみられない。材はクスノキである。

3. 福岡県那珂久平遺跡¹⁰⁾

8 号堰から出土し、弥生時代後葉～終末とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

全長 25.8cm (22.5cm)、幅 11.5cm (7.0cm)、高さ 3.3cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に 5 列の段がある。材は広葉樹である。

4. 福岡県雀居遺跡¹¹⁾

環濠から出土し、弥生時代後期後半とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

全長 30.4cm (26.7cm)、幅 14.2cm (9.7cm)、高さ 4.1cm を測る。側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に 12 条の隆起帯がある。材は広葉樹である。

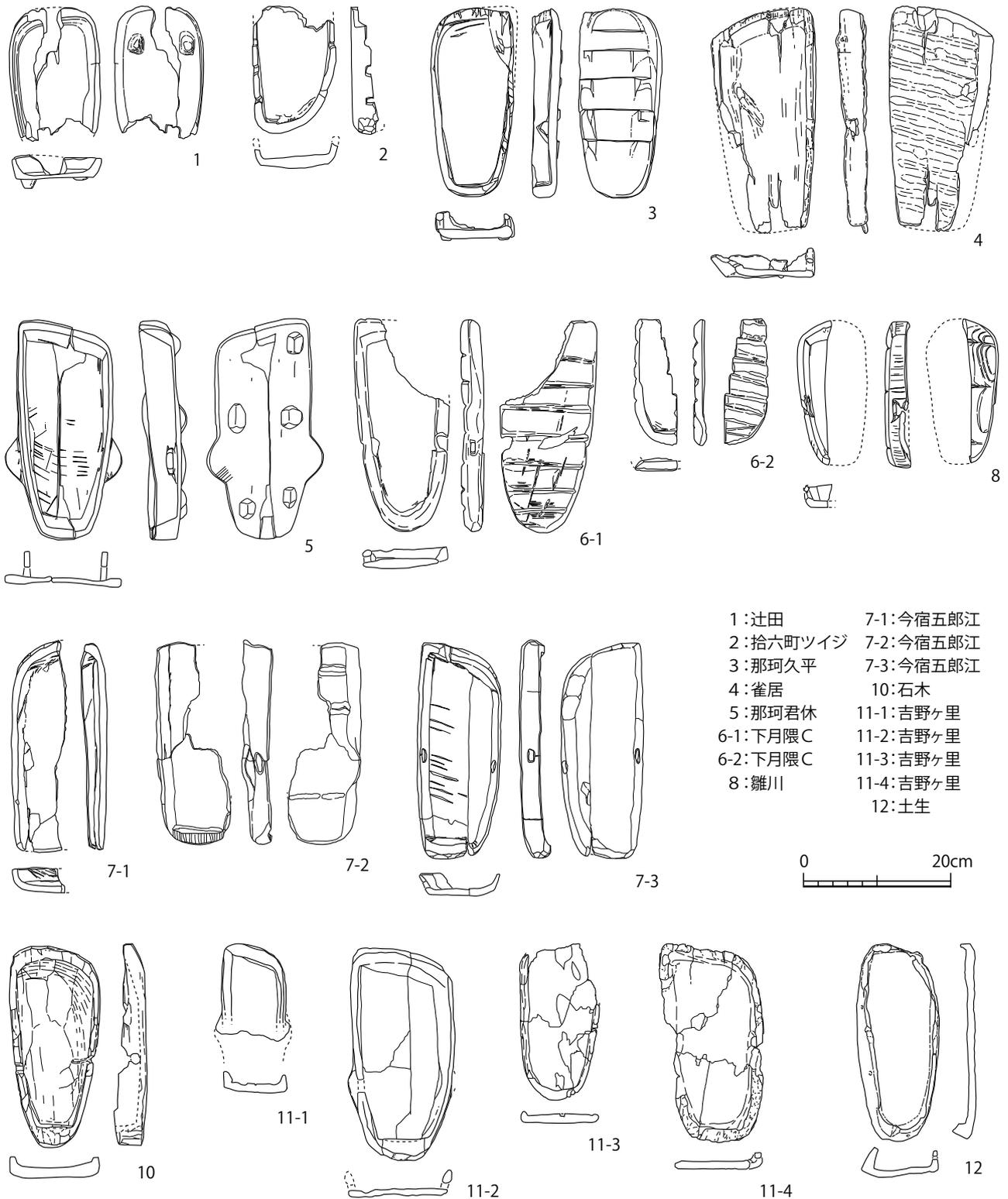
5. 福岡県那珂君休遺跡¹²⁾

SD20 内に設置された SX31 井堰から出土し、弥生時代末～古墳時代初頭とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

全長 30.2cm (23.2cm)、幅 13.2cm (10.4cm)、高さ 4.4cm を測る。方形に近い丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。紐通し孔に対応する側面に舌状の突起がつく。外底面にスパイク状の突起が 5 つある。突起の状況から、2 列三対の突起であった可能性があるが、左前方の突起は確認できない。材はクリである。

6. 福岡県下月隈 C 遺跡¹³⁾

溝 SD104 から 2 点出土し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭とされる。多量の木製品が出土しており、



※図の出典は本文末に一括して掲載

図1 北部九州の事例

鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

6-1は、全長29.1cm(23.4cm)、残存幅13.0cm、高さ3.1cmを測る。平面形は丸形で、側面に1孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に7条の切り込みがある。材は広葉樹である。

6-2は、残存長17.6cm、残存幅7.0cmを測る。平面形は丸形である。側面および底面の紐通し孔は確認できないが、6-1とよく似た特徴を示すことから、本来1孔一対の紐通し孔が一組穿孔されていたと考えられる。外底面に7条以上の切り込みがある。材は広葉樹である。

7. 福岡県今宿五郎江遺跡¹⁴⁾

環濠 SD-01 から 5 点出土し、弥生時代後期とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

7-1 は、残存長 29.0cm、残存幅 7.6cm、高さ 3.7cm を測る。方形に近い丸形で、側面および底面の紐通し孔は確認できない。外底面に加工はみられない。材はタブノキ属である。

7-2 は、全長 27.5cm (25.2cm)、残存幅 10.0cm、高さ 4.4cm を測る。方形に近い丸形で、左側面に 1 孔の紐通し孔が残存する。本来 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔されていたと考えられる。外底面に加工はみられない。材はタブノキ属である。

7-3 は、報告書図中の W072 と W073 は接合すると記載されているので、合成した数値を提示した。全長 29.4cm (25.6cm)、幅 11.6 cm、高さ 4.1cm を測る。方形に近い丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。材はスダジイである。

7-4 は、残存長 22.2cm、残存幅 10.8 cm、高さ 5.3cm を測る。小片のため、形態・構造の詳細は不明である。材はタブノキ属である。

7-5 は、残存長 19.7 cm、残存幅 5.8 cm、高さ 5.6cm を測る。小片のため、形態・構造の詳細は不明である。材はクスノキ科である。

8. 福岡県雛川遺跡¹⁵⁾

SX001 から出土し、弥生時代後期～古墳時代前期とされる。多量の木製品が出土しており、鍬類など農具が多いという傾向がみられる。

残存長 19.7cm、残存幅 4.9cm、高さ 3.4cm を測る。平面形は丸形で、左側面に 1 孔の紐通し孔が残存する。本来 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔されていたと考えられる。外底面に 3 条の刻みがある。材は広葉樹である。

9. 福岡県惣利遺跡¹⁶⁾

詳細は不明であるが、比佐氏の論文によれば、弥生中期前半とされる。

残存長 20.6cm、残存幅 5.4cm、高さ 3.6cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔の紐通し孔が残存する。本来 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔されていたと考えられる。また、舌状の突起の一部が確認できる。外底面に加工はみられない。材は広葉樹である。

10. 佐賀県石木遺跡¹⁷⁾

堰跡 SX006 から出土し、古墳時代後期とされる¹⁸⁾。多量の木製品が出土しているが、同時に土製および石製の祭祀具が出土しており、祭祀行為の場であったと想定されている。

全長 27.6cm (22.5cm)、幅 12.2cm (10.1cm)、高さ 4.2cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。材は広葉樹である。

11. 佐賀県吉野ヶ里遺跡¹⁹⁾

SD0105 環濠跡から 2 点、297 区から 1 点、SX0001 から 1 点の計 4 点出土し、前 2 者は弥生時代後期、後 2 者は弥生時代中期後半～後期前半とされる。SD0105 からは多量の木製品が出土しており、鍬類など農具のほか、祭祀具も含まれる。

11-1 は、残存長 13.4cm、幅 8.8cm (6.4cm)、高さ 2.4cm を測る。平面形は丸形で、側面および底面の紐通し孔は確認できないが、側面に一対の舌状の突起がつく。11-2 とよく似た特徴を示すことから、本来 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔されていたと考えられる。外底面に加工はみられない。材はスダジイである。

11-2 は、全長 29.2cm (22.0cm)、幅 13.6cm (10.1cm)、高さ 3.6cm を測る。平面形は丸形で、左側面に 1 孔の紐通し孔が残存する。本来 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔されていたと考えられる。紐通し孔に対応する左側面には舌状の突起が残存する。底面には穿孔されない。外底面に加工はみられない。材はスダジイである。

11-3 は、残存長 21.4 cm、幅 10.8 cm (8.4 cm)、高さ 1.6cm を測る。平面形は丸形で、側面および底面の紐通し孔は確認できない。外底面に加工はみられない。材はクスノキである。

11-4 は、全長 27.0cm (22.4cm)、幅 14.2cm (10.4cm)、高さ 2.2cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。材はクスノキである。

12. 佐賀県土生遺跡²⁰⁾

河川跡 SD14 から出土し、弥生時代中期前半とされる。木製品が数点出土しているが、特に傾向はみられない。

全長 27.2cm (23.8cm)、幅 11.1cm (7.6cm)、高さ 4.1cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔

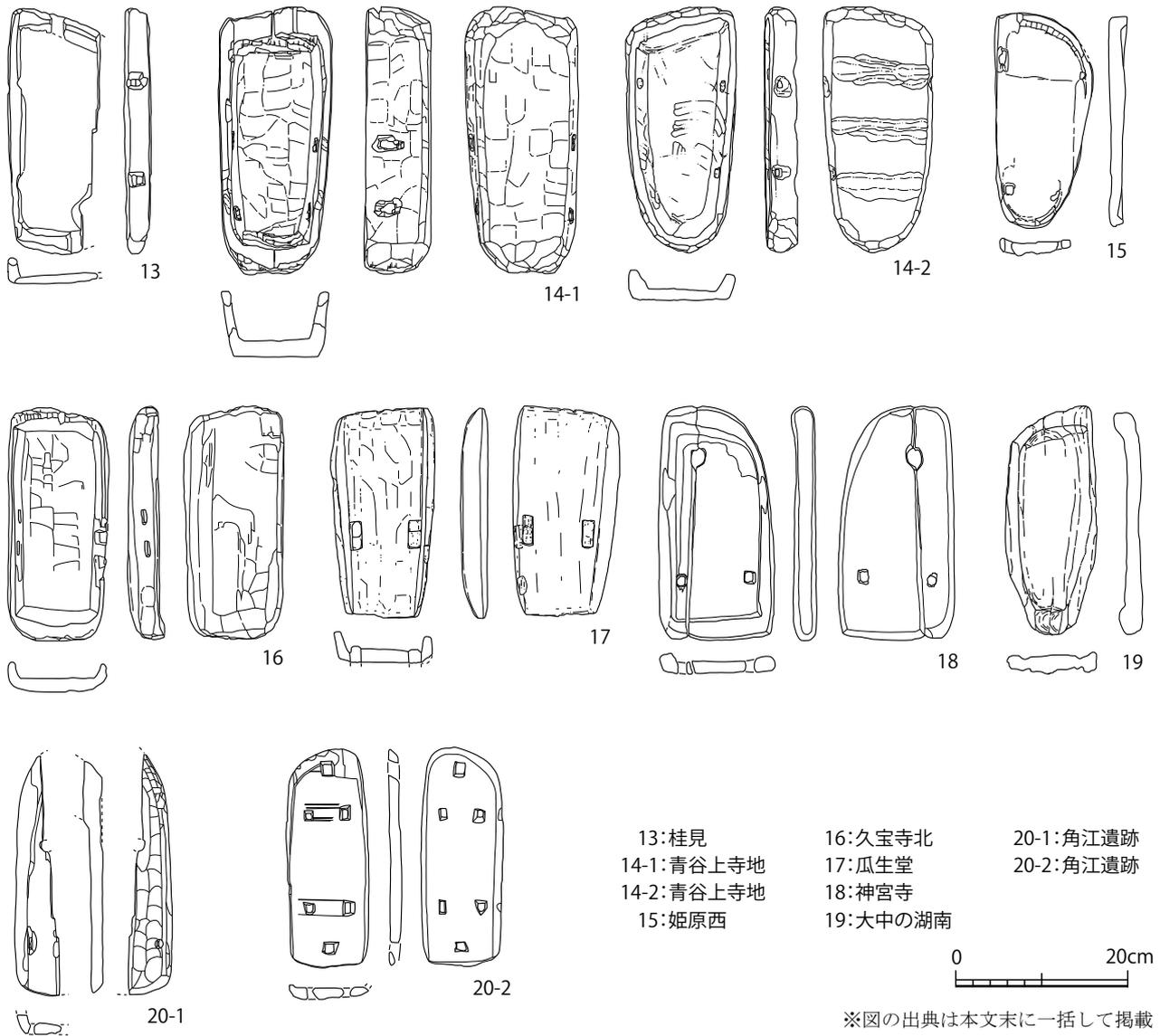


図2 山陰・近畿・東海の事例

が二組穿孔される。踵部にも1孔穿孔されており、計5ヶ所に紐通し孔が穿孔される。外底面に加工はみられない。材はクスノキである。

13. 鳥取県桂見遺跡²¹⁾

包含層から出土し、弥生時代中期末～古墳時代前期とされる。多量の木製品が出土しており、その中には祭祀具も含まれるが、詳細は不明である。

全長28.5cm(22.0cm)、残存幅10.5cm、高さ3.1cmを測る。平面形は方形で、左側面に2孔の紐通し孔が残存する。本来1孔一対の紐通し孔が二組穿孔されていたと考えられる。外底面に加工はみられない。

14. 鳥取県青谷上寺地遺跡²²⁾

14-1はSD20から出土し、弥生時代後期初頭～後葉とされる。14-2はV2層から出土し、弥生時代前期後葉

～中期とされる。SD20からは多量の木製品が出土しており、その中には祭祀具も含まれるが、詳細は不明である。

14-1は、全長31.4cm(21.5cm)、幅13.1cm(9.2cm)、高さ7.6cmを測る。平面形は方形で、側面に1孔一対の紐通し孔が二組穿孔される。外底面に加工はみられない。穿孔部の上端面には紐ずれ痕があることから、実際に使用されたものと考えられる。

14-2は、全長28.8cm(21.0cm)、幅12.9cm(8.0cm)、高さ3.8cmを測る。平面形は丸形で、側面に1孔一対の紐通し孔が二組穿孔される。外底面に3条の溝が彫り込まれる。材はスギである。

15. 島根県姫原西遺跡²³⁾

自然河道10c層から出土し、弥生時代後期～古墳時代前期とされる。多量の木製品が出土しているが、中で

も祭祀具に類例の少ない特殊なものが多いという点で注目されている。特に、弩形木製品や琴板、木製三稜鎌などが含まれることから、中国から陰陽思想や文物が多量にあるいは頻りに流入した可能性があり、新しい祭祀形態の出現を想定させる資料であるとされている²⁴⁾。

全長 25.2cm (21.8cm)、幅 11.4cm (9.2cm)、高さ 2.0cm を測る。平面形は方形で、底面に 1 孔一対の紐通し孔が二組穿孔されるが、側面に穿孔はない。外底面に加工はみられない。材はスギである。

16. 大阪府久宝寺北遺跡²⁵⁾

NR4002 から出土し、古墳時代前期とされる。木製品が共伴するが、特に傾向はみられない。報告書では、加工は丁寧で、蓋の可能性があると報告されているが、形態的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。

全長 27.3cm (20.8cm)、幅 11.5cm (8.5cm)、高さ 3.6cm を測る。平面形は方形で、両側面に 2 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。

17. 大阪府瓜生堂遺跡²⁶⁾

祭祀場から出土し、弥生時代中期～後期とされる。他の祭祀具とともに出土しており、何らかの祭祀行為ともなって使用された可能性が高いと考えられる。

全長 24.4cm (24.4cm)、幅 11.9cm (8.4cm)、高さ 3.1cm を測る。平面形は方形で、底面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔されるが、側面に穿孔はない。孔には栓状の詰め物が残る。外底面に加工はみられない。材はエノキ属である。表面に足跡らしき使用痕があり、裏面と一側面にも使用による摩擦痕がみられることから、実際に使用されたものと考えられる。報告書では、下駄の一種かとされている。

18. 滋賀県神宮寺遺跡²⁷⁾

SR01 から出土し、古墳時代後期とされる。多量の木製品が出土しており、祭祀具がまとまって出土している。

全長 27.1cm (21.4cm)、幅 13.5cm (9.8cm)、高さ 2.2cm を測る。平面形は丸形で、底面に下駄の鼻緒孔と同じような位置に紐通し孔が穿孔されるが、側面に穿孔はない。外底面に加工はみられない。報告書には田下駄と報告されているが、形態的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。

19. 滋賀県能登川高校所蔵品²⁸⁾

能登川高校所蔵品で、東近江市教育委員会が再整理した資料である。ラベルが散逸しており、出土遺跡など詳細は不明である。しかし、他の木製品に大中の湖南遺跡のものがあることから、同遺跡から出土した可能性が高いと考えられる。また、正確な帰属時期も不明であるが、遺跡の主要時期や所蔵土器の様相から判断して弥生時代中期頃の可能性が高いと考えられる。

全長 26.6cm (19.2cm)、幅 10.6cm (6.6cm)、高さ 2.8cm を測る。平面形は丸形で、底面および側面に紐通し孔は穿孔されない。外底面に加工はみられない。成形があまく、穿孔も見られないことから、未成品の可能性がある。報告書では容器と報告されているが、形態的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。

20. 静岡県角江遺跡²⁹⁾

8 層上部水田から 2 点出土し、弥生時代後期とされる。多量の木製品が出土しており、鋤類など農具が多いという傾向がみられる。

20-1 は、残存長 28.2cm、残存幅 5.2cm、高さ 2.2cm を測る。小片のため、形態・構造の詳細は不明である。材はヒノキである。

20-2 は、全長 25.7cm (24.4cm)、幅 9.6cm (8.0cm)、高さ 1.5cm を測る。方形に近い丸形で、底面に 2 孔一対の紐通し孔が二組穿孔され、両小口にも 1 孔一対の穿孔がみられる。下駄のような履物で、天地を逆転して履き直したのだろう。材はツガ属である。

21. 福井県上河北遺跡³⁰⁾

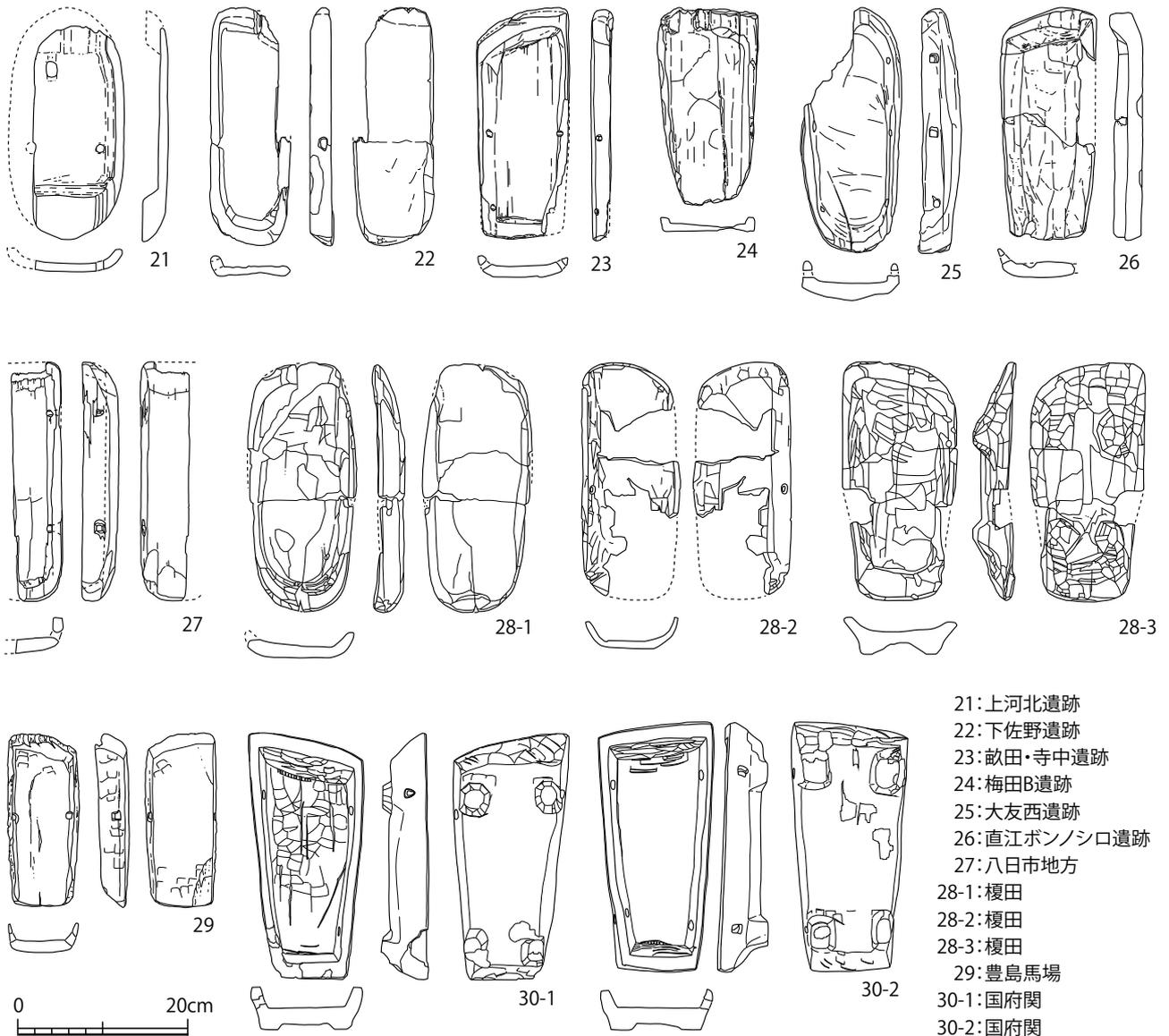
旧河道から出土し、古墳時代とされる。多量の木製品が出土しており、祭祀具がまとまって出土している。

残存長 25.2cm、残存幅 10.6cm、高さ 3.2cm を測る。平面形は丸形で、底面に下駄の鼻緒孔と同じような位置に紐通し孔が穿孔されるが、側面に穿孔はない。外底面に加工はみられない。報告書には下駄と報告されているが、形態的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。下駄が共伴しており、榎田遺跡の事例と合わせて、興味深い事例といえる。

22. 富山県下佐野遺跡³¹⁾

SD201 から出土し、弥生時代後期～古墳時代前期とされる。木製品が共伴するが特に傾向はみられない。

残存長 28.0cm、残存幅 9.2cm、高さ 2.4cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔さ



※図の出典は本文末に一括して掲載

図3 北陸・関東信越の事例

れる。外底面に加工はみられない。材はスギである。報告書では容器かと報告されているが、形態的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。

23. 石川県畝田・寺中遺跡³²⁾

SD16 から出土し、古墳時代中期～後期とされる。木製品が共伴するが特に傾向はみられない。

全長 27.5cm (21.2cm)、幅 11.0cm (7.4cm)、高さ 1.4cm を測る。側面に 1 孔一対の紐通し孔が二組穿孔される。外底面に加工はみられない。

24. 石川県梅田B遺跡³³⁾

SD130 から出土し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭とされる。木製品が共伴するが特に傾向はみられない。紐通し孔がみられないこと、全体的な成形があま

いことから、未成品の可能性もある。

全長 23.8cm (20.7cm)、幅 12.0cm (8.7cm)、高さ 1.9cm を測る。方形に近い丸形で、底面および側面に紐通し孔は穿孔されない。外底面に加工はみられない。材はスギである。報告書では田下駄かと報告されているが、形態的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。

25. 石川県大友西遺跡³⁴⁾

東 SD01 から出土し、弥生時代終末期とされる。木製品が共伴するが特に傾向はみられない。

全長 29.1cm (24.0cm)、幅 11.6cm (8.4cm)、高さ 2.0cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が三組穿孔される。外底面に加工はみられない。材はヒノキである。報告書では容器と報告されているが、形態

的特徴から板状履物の可能性が高いと考えられる。

26. 石川県直江ボンノシロ遺跡³⁵⁾

SD03 から出土し、弥生時代中期～古墳時代前期とされる。木製品が共伴するが特に傾向はみられない。

全長 27.4cm (23.4cm)、幅 11.0cm (6.9)、高さ 3.0cm を測る。平面形は方形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。

27. 石川県八日市地方遺跡³⁶⁾

埋積浅谷から出土し、弥生時代中期前葉～中期後葉とされる。多量の遺物が出土している。祭祀具に分類される遺物は、埋積浅谷から出土したものが多くとされており、何らかの祭祀行為がおこなわれた可能性が高いと考えられる。

残存長 28.4cm、残存幅 5.6cm、高さ 4.2cm を測る。平面形は丸形で、側面に 2 孔の紐通し孔が残存し、本来 1 孔一対の紐通し孔が二組穿孔されていたと考えられる。外底面に加工はみられない。材はスギである。

28. 長野県榎田遺跡³⁷⁾

SG3 から 3 点出土し、古墳時代中期とされる³⁸⁾。多量の木製品が出土しているが、未製品とともに木屑が出土していることから、ここで木製品が生産された可能性があると考えられる。さらに、量的には多くないものの、武器などの特殊品や祭祀具が含まれることから、有力者層による祭祀行為がおこなわれた場であったとも想定されている。板状履物とともに、下駄も出土している。板状履物と下駄とが共伴する数少ない事例であり、両者の関係を考えるうえで、興味深い事例といえる。

28-1 は、全長 29.6cm (28.6cm)、幅 12.5cm (9.0cm)、高さ 2.8cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。材はトチノキである。

28-2 は、残存長 27.5cm、幅 11.5cm (6.0cm)、高さ 4.0cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。材はカエデ属である。

28-3 は、全長 28.8cm (22.2cm)、幅 13.4cm (11.4cm)、高さ 4.9cm を測る。平面形は丸形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面にスパイク状の突起が 4 つある。材はヤナギ属である。

29. 東京都豊島馬場遺跡³⁹⁾

SH124⁴⁰⁾ に付属する土坑から出土し、弥生時代末～古墳時代初頭とされる。木製品がまとまって出土しているが、特に傾向はみられない。

全長 20.2cm (19.2cm)、幅 8.4cm (5.8cm)、高さ 3.6cm を測る。平面形は方形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が一組穿孔される。外底面に加工はみられない。材はコナラ属である。

30. 千葉県国府関遺跡⁴¹⁾

自然流路から 2 点出土し、弥生時代末～古墳時代初頭とされる。木製品はすべて自然流路から出土しており、生産具・建築材などとともに、祭祀具も出土している。特定の用途のものが集中するという傾向はみられない。今回紹介した事例で、唯一そろいで出土した事例である。

30-1 は、全長 29.3cm (22.8cm)、幅 13.2cm (9.2cm)、高さ 5.2cm を測る。平面形は方形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が二組穿孔される。外底面にスパイク状の突起が 4 つある。なお、全体的に加工痕が良く残り、突起の摩耗も顕著ではないことから、使用する機会は多くなかったのではないかとされる。材はモクレン属である。

30-2 は、全長 29.6cm (24.0cm)、幅 13.6cm (9.8cm)、高さ 5.6cm を測る。平面形は方形で、側面に 1 孔一対の紐通し孔が二組穿孔される。外底面にスパイク状の突起が 4 つある。材はモクレン属である。

IV. 事例の検討

(1) 分布状況 (図 4)

北部九州 (12 遺跡 20 例)・山陰 (3 遺跡 4 例)・近畿 (4 遺跡 4 例)・北陸 (7 遺跡 7 例)・東海・中部 (2 遺跡 5 例)・関東 (2 遺跡 2 例) となっており、関東以西に広く分布する⁴²⁾。これをみれば明らかなように、北部九州に分布が集中するという傾向が顕著である。また、比佐氏が集成した時点では未確認であった近畿にも事例を確認できたほか、北陸にやや事例が多い傾向がみられる。未だ南部九州・山陽・四国など未確認の地域も残されているが、少なくとも西日本においては、一定の広がりをもっていたと考えてよいだろう。

分布状況において注目されるのは、中国地方である。具体的にいえば、山陰では事例が確認されているのに対し、山陽では全く事例が確認されていない⁴³⁾。また、熊本・大分以南の南部九州でも事例は確認されていない

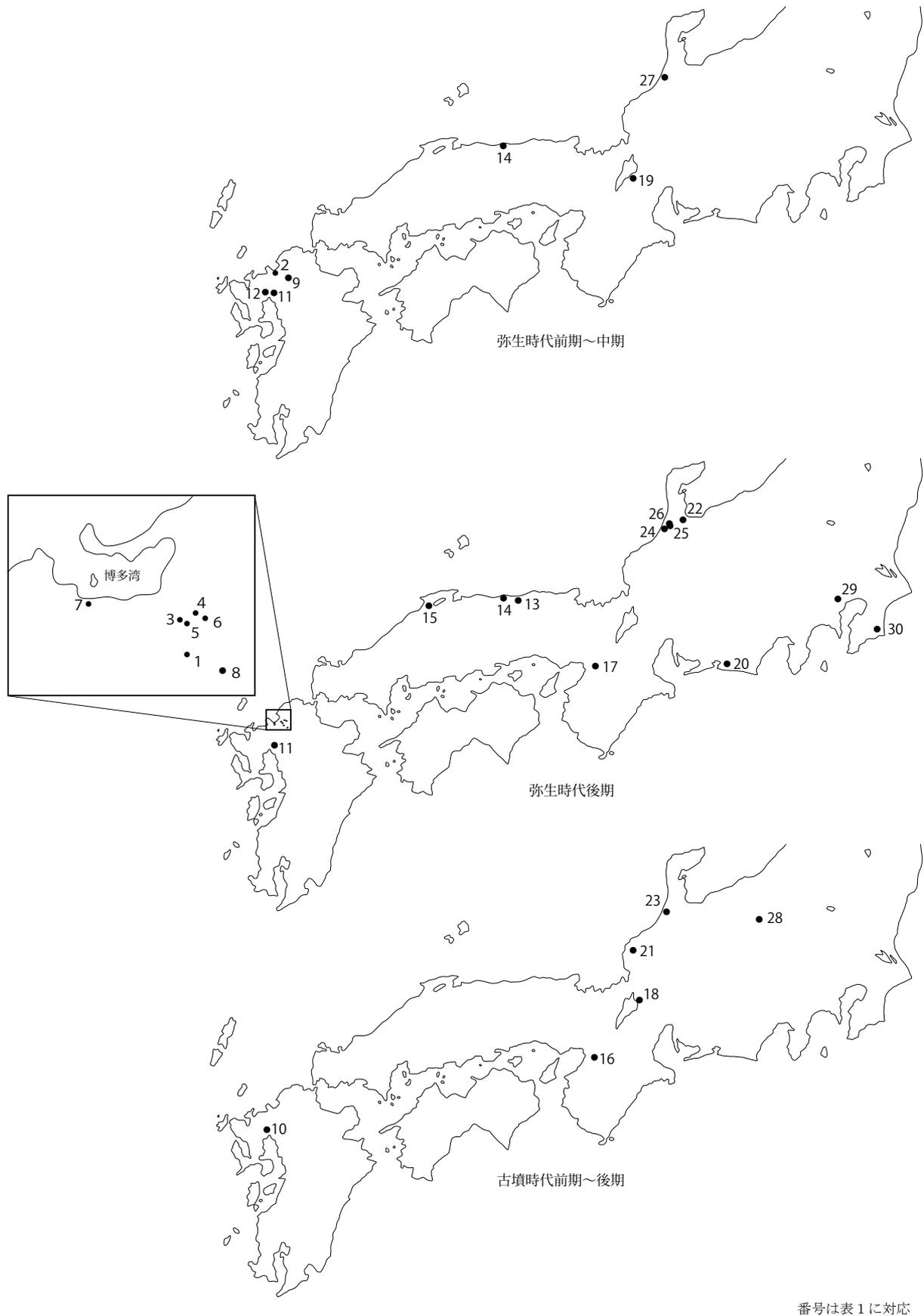


図 4 時期別板状履物分布図

表1 地域別板状履物一覧

番号	遺跡名	都道府県	遺構	時期	型式	長さ		幅		高さ	長/幅		樹種	備考
						外	内	外	内		外	内		
1	辻田遺跡	福岡県	大溝	弥生後期	—	(17.8)	(16.0)	12.2	9.6	4.5	—	—	クリ	外底前部にスパイク状の突起2つあり。
2	拾六町ツヅミ遺跡	福岡県	第3号土壇下層	弥生前期後半～末	e	(17.5)	(16.1)	11.5	9.6	3.6	—	—	クスノキ	左側面に1孔、右側面に3孔の紐通し孔あり。
3	那珂久平遺跡	福岡県	8号塚	弥生後～終末	a	25.8	22.5	11.5	7.0	3.3	2.2	3.2	広葉樹	外底に5列の段あり。両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
4	雀居遺跡	福岡県	溝	弥生後期後半	f	30.4	26.7	14.2	9.7	4.1	2.1	2.8	広葉樹	外底に12条の隆起帯あり。両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
5	那珂君休遺跡	福岡県	S D 20	弥生末～古墳初	b	30.2	23.2	13.2	10.4	4.4	2.3	2.2	クリ	外底にスパイク状の突起5つあり。両側面に1孔一对の紐通し孔と、ヒレ状の突起あり。
6-1	下隈C遺跡	福岡県	溝S D 104	弥生後期後半～古墳前期初頭	a	29.1	23.4	(13.0)	(9.6)	3.1	—	—	広葉樹	外底に5列の隆起帯あり。両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
6-2	下隈C遺跡	福岡県	溝S D 104	弥生後期後半～古墳前期初頭	—	(17.6)	(15.0)	(7.0)	(4.4)	—	—	—	広葉樹	外底に7条の切り込み溝あり。両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
7-1	今宿五郎江遺跡	福岡県	環濠S D - 01	弥生後期	c	(29.0)	(25.6)	(7.6)	(5.6)	3.7	—	—	タブノキ属	側面に1孔一对の紐通し孔あり。
7-2	今宿五郎江遺跡	福岡県	環濠S D - 01	弥生後期	c	27.5	25.2	(10.0)	(7.2)	4.4	—	—	タブノキ属	側面に1孔一对の紐通し孔あり。
7-3	今宿五郎江遺跡	福岡県	環濠S D - 01	弥生後期	c	29.4	25.6	(7.2)	(5.6)	4.1	—	—	スダジイ	側面に1孔一对の紐通し孔あり。
7-4	今宿五郎江遺跡	福岡県	環濠S D - 01	弥生後期	—	(22.2)	(20.4)	(10.8)	(8.0)	5.3	—	—	タブノキ属	
7-5	今宿五郎江遺跡	福岡県	環濠S D - 01	弥生後期	—	(19.7)	(17.2)	(5.8)	(2.8)	5.6	—	—	クスノキ科	
8	鱈川遺跡	福岡県	S X 001	弥生後期～古墳前期	a	(19.7)	—	(4.9)	—	3.4	—	—	広葉樹	外底に3条の刻みあり。左側面に1孔の紐通し孔あり。
9	惣利遺跡	福岡県	不明	弥生中期前半	c	(20.6)	—	(5.4)	—	3.6	—	—	広葉樹	写真のみ。木沓でない可能性あり。
10	石木遺跡	佐賀県	S X 006	古墳後期	c	27.6	22.5	12.2	10.1	4.2	2.3	2.2	広葉樹	両側面に紐通し孔あり。
11-1	吉野ヶ里遺跡	佐賀県	S D 0105 環壕跡	弥生後期	c	(13.4)	(10.4)	8.8	6.4	2.4	—	—	スダジイ	両側面に一对の舌状の突起あり。
11-2	吉野ヶ里遺跡	佐賀県	S D 0105 環壕跡	弥生後期	c	29.2	22.0	13.6	10.1	3.6	2.1	2.2	スダジイ	左側面に舌状の突起・穿孔残存。本来一对の紐通し孔と考えられる。
11-3	吉野ヶ里遺跡	佐賀県	297区	弥生中期後半～後期前半	—	(21.4)	(20.0)	10.8	8.4	1.6	—	—	クスノキ	
11-4	吉野ヶ里遺跡	佐賀県	S X 0001	弥生中期後半～後期前半	c	27.0	22.4	14.2	10.4	2.2	1.9	2.2	クスノキ	側面に1孔一对の紐通し孔あり。
12	土生遺跡	佐賀県	S D 14	弥生中期前半	e	27.2	23.8	11.1	7.6	4.1	2.5	3.1	クスノキ	側面に1孔一对、踵部1孔、計5ヶ所の紐通し孔あり。
13	桂見遺跡	鳥取県	包含層	弥生中期末～古墳前期	i	28.5	22.0	(10.5)	(9.0)	3.1	—	—		左側面に1孔の紐通し孔あり。
14-1	青谷上寺地遺跡	鳥取県	V 2層	弥生前期後半～中期	d	31.4	21.5	13.1	9.2	7.6	2.4	2.3		両側面に1孔一对の紐通し孔あり。裏面に3条の溝を彫り込む。
14-2	青谷上寺地遺跡	鳥取県	S D 20	弥生後期初頭～後葉	e	28.8	21.0	12.9	8.0	3.8	2.2	2.6	スギ	台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
15	姫原西遺跡	鳥根県	10 c層	弥生後期～古墳前期	e	25.2	21.8	11.4	9.2	2.0	2.2	2.4	スギ	内底両端に1孔一对の紐通し孔あり。
16	久宝寺北遺跡	大阪府	N R 4002	古墳前期	i	27.3	20.8	11.5	8.5	3.6	2.4	2.4		台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
17	瓜生堂遺跡	大阪府	祭祀場	弥生中期～後期	g	24.4	24.4	11.9	8.4	3.1	2.1	2.9	エノキ属	表面に足跡らしき使用痕あり。底面に2ヶ所穿孔あり。孔には栓状の詰め物あり。
18	神宮寺遺跡	滋賀県	S R 01	古墳後期	—	27.1	21.4	13.5	9.8	2.2	2.0	—		縁部が木履状に立ち上がる。
19	能登川高校所蔵品	滋賀県	不明	弥生中期?	—	26.6	19.2	10.6	6.6	2.8	2.5	2.9		報告書中には容器(皿)と記載。紐通し孔はないが、その形状から木沓の可能性あり。
20-1	角江遺跡	静岡県	8層上部水田	弥生後期	—	(28.2)	—	(5.2)	—	2.2	—	—	ヒノキ	台側面・底面に穿孔あり。
20-2	角江遺跡	静岡県	8層上部水田	弥生後期	—	25.7	24.4	9.6	8.0	1.5	2.7	3.1	ツガ属	底面に1孔一对の穿孔2ヶ所あり。底板両端にも1孔一对の穿孔あり。
21	上河北遺跡	福井県	旧河道	古墳	—	(25.2)	(16.0)	(10.6)	(8.0)	3.2	—	—		報告書には下駄と報告。穿孔の形態などが他の板状履物とは異なる。
22	下佐野遺跡	富山県	S D 201	弥生後期～古墳前期	c	(28.0)	(27.2)	(9.2)	(5.6)	2.4	—	—	スギ	台側面に1孔一对の紐通し孔あり。
23	畝田・寺中遺跡	石川県	S D 16	古墳中～後期	g	27.5	21.2	11.0	7.4	1.4	2.5	2.9	ネズコ	台側面に1孔一对の紐通し孔2つあり。
24	梅田B遺跡	石川県	S D 130	弥生後期後半～古墳前期初	—	23.8	20.7	12.0	8.7	1.9	2.0	2.4	スギ	報告書では田下駄?と記載。
25	大友西遺跡	石川県	東S D 01	弥生終末期	e	29.1	24.0	11.6	8.4	4.7	2.5	2.9	ヒノキ	報告書には容器と記載。台側面に1孔一对の紐通し孔3つあり。
26	直江ボンノシロ遺跡	石川県	S D 03	弥生中～古墳前	g	27.4	23.4	11.0	6.9	3.0	2.5	3.4		
27	八日市地方遺跡	石川県	埋積浅谷	弥生中期前葉～中期後葉	i	(28.4)	(24.4)	(5.6)	(4.0)	4.2	—	—	スギ	台側面に1孔一对の紐通し孔あり。
28-1	榎田遺跡	長野県	S G 3	5 c 第2四半期	c	29.6	28.6	12.5	9.0	2.8	2.4	3.2	トチノキ	台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
28-2	榎田遺跡	長野県	S G 3	5 c 第1四半期	c	(27.5)	—	11.5	6.0	4.0	—	—	カエデ属	左側面に1孔の紐通し孔あり。
28-3	榎田遺跡	長野県	S G 3	5 c 第1四半期	b	28.8	22.2	13.4	11.4	4.9	2.1	1.9	ヤナギ属	台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。外底にスパイク状の突起4つあり。
29	豊島馬場遺跡	東京都	S H 124	弥生末～古墳初	g	20.2	19.2	8.4	5.8	3.6	2.4	3.3	コナラ属	台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。
30-1	国府岡遺跡	千葉県	自然流路	弥生末～古墳初	h	29.3	22.8	13.2	9.2	5.2	2.2	2.5	モクレン属	台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。外底にスパイク状の突起4つあり。
30-2	国府岡遺跡	千葉県	自然流路	弥生末～古墳初	h	29.6	24.0	13.6	9.8	5.6	2.2	2.4	モクレン属	台両側面に1孔一对の紐通し孔あり。外底にスパイク状の突起4つあり。

ことから、板状履物は分布の中心地である北部九州から、同心円状に拡散したのではないと考えられる。北部九州以東の事例は、北部九州から東方への伝播という視点のみでは、その存在意義を説明することは難しく、他に要因を求めべきであると考えられる。その要因に対する明確な見解を提示することはできない。ただ、北部九州をはじめとして、日本海沿岸地域に事例の約3/4が集中するという点は重要だと考える。板状履物は大陸から伝来した履物であると考えられるが、その窓口は北部九州に限らないことを示している可能性が高い。

(2) 時期的変遷

最も古い事例は、弥生時代前期後半～末の拾六町ツイジ遺跡(2)で、弥生時代前期後葉～中期の青谷上寺地遺跡(14-1)も前期に遡る可能性がある。事例が少なく断定はできないが、板状履物の出現期は前期後半以降であり、前期前半には遡らないと考えられる。この事実は、板状履物の出現期を明らかにするだけでなく、板状履物が稲作とともに伝来したものではないということの意味する点においても重要である。

弥生時代中期になると事例が増加する。弥生時代中期前半の惣利遺跡(9)・土生遺跡(12)、弥生時代中期前葉～中期後葉の八日市地方遺跡(27)が続き、弥生時代中期後葉～後期前葉の吉野ヶ里遺跡(11-3・11-4)、さらに能登川高校所蔵品(19)も弥生時代中期に帰属する可能性がある。このように、事例の増加とともに分布域が広がるのがわかる。中期には、北部九州の事例が集中するという傾向はみられるが、さほど突出した傾向ではない。

板状履物が最も盛行するのは弥生時代後期～末である。弥生時代後期後半の雀居遺跡(4)、弥生時代後期初頭～後葉の青谷上寺地遺跡(13-2)をはじめ、後期に帰属する可能性が高いものを含めると全体の約60%を占める。北部九州に事例が集中する傾向が顕著となる。特に博多湾沿岸において事例が集中するという特徴を示す。また、豊島馬場遺跡(29)・国府関遺跡(30)のように、関東にも分布域が広がる。

古墳時代になると、事例は散見されるものの、急速に減少する。この時期のものとしては、古墳時代前期の久宝寺北遺跡(16)、古墳時代中期の榎田遺跡(28-1～3)、

古墳時代中期～後期の畝田・寺中遺跡、古墳時代後期の石木遺跡(9)・神宮寺遺跡(18)がある。石木遺跡を除けば、いずれも北部九州以外の地域のものであり、北部九州における板状履物は、基本的に古墳時代には降らないとみてよいだろう。

このように、最古の事例は北部九州にあるものの、弥生時代中期までの状況は必ずしも他地域に優越するような状況ではない。これが後期になると、北部九州の事例数が他地域を圧倒することから、この時期に画期を求めることができる。分布域も拡大することから、北部九州における板状履物の盛行が他地域に影響を与えたと考えることもできる。しかし、北部九州においても板状履物が盛行するのは、弥生時代後期のことであり、北部九州における事例の増加が刺激となって、関東を含む広大な地域における板状履物の出現を促したとは考えにくい。

(3) 構造的特徴

平面形・紐通し孔・外底面の3つの要素をもとに分類する。

平面形

I類：丸形

II類：方形

紐通し孔の構造⁴⁴⁾

A類：側面ないしは底面に1孔一対一組開けるもの

B類：同じく1孔一対二組(三組)開けるもの

外底面の加工

1類：横方向に溝・段などを施すもの

2類：スパイク状の突起をつけるもの

3類：加工はなく平坦なもの

この分類に基づき、実際の出土資料に照らして組合せを抽出すると、以下の9形式となる。

a形式：I A 1類(3・6-1・8)

b形式：I A 2類(5・28-3)

c形式：I A 3類(7-1・7-2・7-3・9・10・11-1・11-2・11-4・22・28-1・28-2)

d形式：I B 1類(14-1)

e形式：I B 3類(2・12・14-2・15・25)

f形式：II A 1類(4)

g形式：II A 3類(17・23・26・29)

h形式：II B 2類(29-1・29-2)

i 形式：Ⅱ B 3類 (13・16・26)

全体的にみると、c 形式が 11 例と最も多く、5 例の e 形式、4 例の g 形式が続く。この状況から、主体を占めるのは 3 類、つまり外底面に加工を施さないものであることがわかる。逆にいえば、a 形式を含め、外底面に溝・段などの加工を施す 1 類に属する事例は、青谷上寺地遺跡 (14-1) を除き、北部九州にしか事例がなく、局地的な特徴といえるだろう。この傾向は平面形についてもいえる。北部九州の事例は、ほぼ全てがⅠ類に属しており、Ⅱ類に属する事例は雀居遺跡 (4) のみである。これに対し、その他の地域の事例は、過半数がⅡ類であり、北部九州の様相とは明確に異なる。

このような状況から、分布状況・時期的変遷と同様に、北部九州の板状履物が他地域の板状履物に影響を与えたとは考えがたい。また、時期的変遷と上記の各形式とは、明確な関係をうかがうことはできず、形式の違いは、型式編年のような縦に組列される関係ではなく、地域性の表徴といった横に広がりをもつ関係であるといえる。

(4) 樹種

樹種が判明している事例は、29 点である。スギが 5

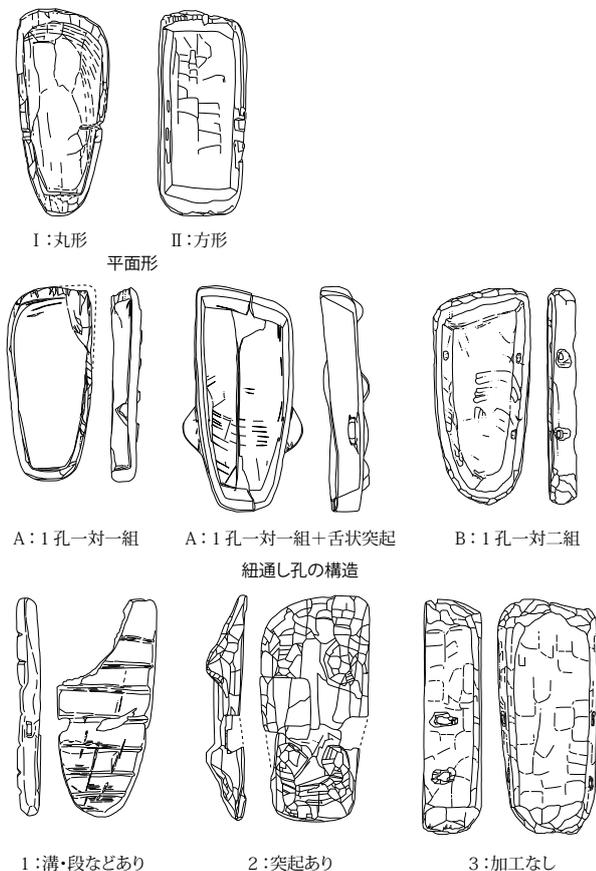


図5 分類一覧

点で最も多く、次いでクスノキが 4 点、スダジイ・タブノキ属が各 3 点、クリ・ヒノキ・モクレン属が各 2 点、トチノキ・ネズコ・カエデ属・ヤナギ属・エノキ属・コナラ属・ツガ属が各 1 点で、これ以外に詳細な樹種は明らかではないが広葉樹とされるものが 7 点である。個別の樹種としてはスギが最も多いが、特定の樹種に偏重する傾向はみられない。ただ、樹種については様々な材が用いられているが、針葉樹であるスギ以外は、いずれも広葉樹であることから、広葉樹が意図的に選択されたと考えられる⁴⁵⁾。

注目されるのは、板状履物の用材の大半が広葉樹であるという点である。これに対し、同じく木製履物である田下駄の樹種は、その大半がスギであり、言うまでもなく針葉樹である。板状履物が実用の作業具であるとすれば、実用の農具とされる田下駄の主要な用材である針葉樹ではなく、なぜ広葉樹が選択されたのかという疑問が生じる。一般的に、広葉樹は針葉樹より強度・耐水性などの点で優れており、板状履物が実用の作業具であるとすれば、広葉樹の特性が必要とされる場面において使用されるべき履物であったと考えられる。この点は、板状履物には爪先の覆いや鼻緒がなく、足への固定が十分ではなかったことを根拠として、比較的軽作業に従事する際に用いたという想定とは矛盾するものである。この樹種の問題は、板状履物の用途・性格を考えるうえで重要な要素であることから、後述することとしたい。

V. 板状履物の用途

ここでは、板状履物の用途について検討してみたい。この点について積極的に論じた比佐氏は、田下駄の一種であるとする。その根拠をまとめると以下ようになる。

a: 爪先の覆いや鼻緒がないという構造から、歩行の補助具ではなく、何らかの作業用と考えられる。

b: 初現期の資料が北部九州に偏在しており、稲作との関わりで捉えられる状況証拠となり得る。

c: 形態や分布状況などの特殊性から、祭祀具の可能性があり、祭祀遺物との共件事例もある。ただし、非常に使い込まれた事例があること、丈夫な広葉樹を使用しており、細部まで丁寧に加工していることから、全てが形代であったとは考えがたく、実用品である可能性が高い。

d：民具のナンバに形態的特徴が類似しており、また、出土品にも同様の形態の田下駄があることから、用途も共通する可能性がある。

比佐氏の論をみるまでもなく、分布状況や事例数からみて、日常的な歩行用の履物として普及していたとは考えがたく、別の用途を想定すべきだろう。ただし、比佐氏が挙げた根拠をもとに、板状履物を田下駄の一種とするには、看過しがたい問題があるといわざるを得ない。

まず、歩行用でなければ、作業用であると断定するのは早計だろう。比佐氏自身も述べているように、祭祀具の可能性も考慮すべきであり、用途を田下駄の一種とする結論ありきの見解と言わざるを得ない。また、時期的変遷で明らかにしたように、初現期の事例は、弥生時代前期後半までしか遡らないうえ、必ずしも北部九州に偏在するわけではない。むしろ、北部九州において盛行するのは弥生時代後期のことであり、稲作とともに農具として伝来したとは考えがたい。確かに、北部九州の事例は鍬などの農具とともに出土する事例が多く、農具の一種とする見解には一定の説得力があるように見える。しかし、北部九州以外の地域では、むしろ祭祀遺物と共伴する事例のほうが多い。比佐氏が集成した時点では、北部九州の事例が大半であり、その他の地域の事例が僅少であったという、資料的制約による誤認といってよいだろう。最後に、民具のナンバとの形態的類似性から、板状履物を田下駄の一種であるとするが、田下駄は針葉樹が主に用いられているのに対し、板状履物は広葉樹が主に用いられており、用材選択の相違が何によっているのかを説明する必要があるだろう。

上記のように、板状履物を田下駄の一種とすることには問題があると考えられる。以下で、板状履物の用途について考えてみたい。

板状履物の用途を推定するうえで、最も重要な根拠となるのは、共伴遺物の存在であると考えている。板状履物は絶対的な資料数が不足しており、単独で用途や性格などを検討することは難しいと考えるからである。

比佐氏が述べるように、北部九州の事例は農具と共伴するものが多く、農具以外の用途を想定することは難しい。一方、その他の地域の事例は、祭祀遺物と共伴するものが多いという傾向がみられる。特に瓜生堂遺跡出土

例は、祭祀場から出土したものであり、儀礼的要素が強いといえる。また、北部九州の事例は、外底面に溝・段などの加工を施すものが多くみられるが、その他の地域の事例では、青谷上寺地遺跡（14-1）以外にはないなど、それぞれの様相には明確な差がみられる。このため、北部九州とその他の地域の板状履物は、用途が異なっていた可能性もある。この点についてはもう少し資料の増加を待つ必要があるだろう。

なお、履物の祭祀性に関しては、下駄にも同様の傾向がみられる。古墳から出土する下駄の石製模造品⁴⁶⁾は言うまでもなく、初現期の木製下駄も祭祀遺物と共伴する事例が多く、何らかの祭祀行為の際に使用されたとの指摘があり⁴⁷⁾、筆者自身も同様の指摘をしたことがある⁴⁸⁾。このように、祭祀具としての用途は、初現期の下駄における重要な性格の一つであり、板状履物もまた同様の性格を帯びていた可能性が高いと考えられる。積極的な論拠を欠くため、あくまでも漠然とした想像にすぎないが、板状履物の祭祀具としての機能を受け継ぎ、田下駄から派生することで下駄が成立したのではないかと考えている。なお、比佐氏は、板状履物は実用品であることから、形代である祭祀具として評価することに否定的な見解を示している。筆者も板状履物は実用品であり、形代ではないという評価には同意するが、祭祀具ではないという結論には賛同できない。この点については、出土事例が極端に少ないことから、儀礼行為に参列する全ての人が使用するようなものではなく、主催者など特定の人物のみが履くことを許される装束の一部として使用されたと考えている。つまり、祭祀行為に用いる道具ではなく、祭祀行為の清浄性を担保する衣装だったと考えている。歯をつけることで、より清浄性を高めた履物が下駄であり、下駄の出現・展開に呼応するように、板状履物は終焉を迎えたと考えておきたい。

最後に、樹種に関しては、広葉樹が選択的に用いられており、大半がスギ（針葉樹）である田下駄とは大きく異なる点である。下駄も田下駄ほど顕著ではないが、スギをはじめとする針葉樹が多いという傾向がみられる。針葉樹が選択された理由には、用材確保の容易さや地域性などさまざまな要因があったと考えられるが、針葉樹であっても使用に際して不都合がなかったことも要因の一つとして挙げられるだろう。にもかかわらず、広葉樹が

選択的に用いられるからには、田下駄とは異なる用途を想定すべきだろう。その用途が何であったのかを樹種みの傾向を根拠として説明することは難しい。ただ、一般的に針葉樹よりも重厚な広葉樹を用いることに、実用性より象徴性を重視した選択であったとみることができよう。丁寧な作りのものが多いという点も、これが消耗品としての作業具ではなかったことを示唆するのではないだろうか。顕著な使用痕が認められる事例があることを勘案すれば、祭祀という特殊な場面に供される非日常的な実用品であったと評価できる。

VI. まとめ

本稿では、弥生時代～古墳時代の板状履物について、29 遺跡 42 例の出土事例をもとに、分布・时期的変遷・構造的特徴・樹種の分析を通じて様相を検討した。

従来から指摘されているように、板状履物は北部九州に偏在する傾向がみられるが、あくまで弥生時代後期に限定される現象であり、弥生時代前期～中期にはそのような傾向はみられないことを明らかにした。むしろ、前期～中期の事例は、日本海沿岸地域に多く分布するとみることができ、分布の中心地である北部九州から他地域へ拡散したという構図は成り立たないといえる。それは、北部九州の板状履物の構造的特徴からみても、他地域の板状履物に影響を与えたとは考えにくいという点からも首肯できよう。

板状履物の用途に関しては、従来から指摘されているような田下駄の一種ではなく、祭祀具である可能性が高いことを指摘した。一つには、他の祭祀遺物と共伴する事例が多いという出土傾向がある。もう一つは、針葉樹が多く用いられる田下駄や下駄とは異なり、広葉樹が選択的に用いられるなど、実用性よりも象徴性を重視した用材選択がなされたと考えられることを根拠とする。

最後に、板状履物の出自について少し述べておきたい。比佐氏も「大陸か半島から伝来した」と述べているように、板状履物は外来品であり、日本で自生的に出現した履物ではないとされている。初期の事例が日本海沿岸地域に分布する状況からみても、その可能性は高いだろう。ただ、大陸（中国）との関係について全く述べられていないことから、半島（韓国）からの影響をイメージしているのと考えられる。しかし、管見による限り、

韓国における木製履物の初現時期は、5 世紀前半頃であり、かつ、その形態は日本の下駄に基本構造が類似するものである⁴⁹⁾。従って、板状履物は外来品であるという見解には同意するが、その起源は大陸（中国）に求めるべきであり、半島（韓国）の影響を認めることはできない。中国においては、木製履物は木屐と呼ばれ、約 5,300 年前の慈湖遺跡から出土した木屐を初現とし、三国時代の武将である朱然墓から出土した木屐など、量的には少ないものの、木屐の事例が散見される。また、文献上では木製履物についての記録が多く残されている。それによれば、木屐は雨の日の履物であるとされており、かなり普及していたとされる⁵⁰⁾。このことから、板状履物は大陸から直接的に伝来したか、半島を経由したとしても、半島では受容されることなく、直接的に伝来したと考えられる。

日本の木製履物は、田下駄の存在から明らかなように、弥生時代前期前半に遡ることは確実である。これに遅れる前期後半には、板状履物が出現する。田下駄と板状履物の出土量には雲泥の差があることから、同列に扱うことはできないが、比較的早い時期から作業具と祭祀具という二面性をもっていたことを指摘しておきたい。また、板状履物の終息と下駄の出現がほぼ同時期であることを考えると、板状履物の祭祀性は下駄に受け継がれていくのではないかと考えている⁵¹⁾。その是非はともかくとして、板状履物とは祭祀具であり、日本の木製履物は初現期から祭祀性を帯びていることを示す重要な遺物であると位置づけておきたい。

註

- 1) 本村充保 2006 「遺跡出土下駄の編年及び地域性抽出に関する基礎的研究」『考古学論攷』第 29 冊 奈良県立橿原考古学研究所。
- 2) 全訳注藤堂明保・竹田晃・影山輝國 2011 『倭国伝』講談社。
- 3) 田下駄については、別稿を準備しているので、そこで詳述することにし、本稿では必要に応じて、簡単に紹介するに留めることにする。
- 4) 比佐陽一郎 1997 「木製履物雑考」『九州考古学』第 72 号 九州考古学会。
- 5) 比佐氏も本稿でいう板状履物に対して、どのような用語を与えるべきであるのかについて検討しているが、最終

- 的には適切な用語が思いつかないとして、「木製履物」と「」付きでよんでいる。比佐氏の論文を紹介するにあたっては、この用語を用いるべきかもしれないが、一つの遺物に対して、二つの用語を用いることによる混乱を避けるため、「板状履物」に統一することにした。
- 6) 比佐、註4前掲論文の1頁、右段10行目から16行目。
- 7) なお、報告書に記載のない、一部の資料の計測値・形態的特徴・樹種などについては、比佐氏の論文による。
- 8) 福岡県教育委員会1979『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集』。
- 9) 福岡市教育委員会1983『拾六町ツイジ遺跡』。
- 10) 福岡市教育委員会1987『那珂久平遺跡Ⅱ』。
- 11) 福岡市教育委員会1995『雀居遺跡3』。
- 12) 福岡市教育委員会1998『那珂君休遺跡Ⅶ』。
- 13) 福岡市教育委員会2004『下月隈C遺跡Ⅳ 本文編』。
- 14) 福岡市教育委員会2010『今宿五郎江8』。
- 15) 太宰府市教育委員会1996『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅵ』。
- 16) 夜須町教育委員会1997『惣利遺跡Ⅰ』。
- 17) 佐賀県教育委員会1976『石木遺跡』。
- 18) 本事例は、古墳時代後期以降の資料であるが、形態的特徴からみて、板状履物の系譜に連なる履物であることから、ここで紹介することにした。
- 19) 佐賀県教育委員会2015『吉野ヶ里遺跡(第1分冊)』。
- 20) 三日月町教育委員会2005『戊 赤司 赤司東 深川南土生』。
- 21) 鳥取県教育文化財団1996『桂見遺跡一八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区一』。
- 22) 鳥取県埋蔵文化財センター2001『青谷上寺地遺跡3』・同2002『青谷上寺地遺跡4』。
- 23) 島根県埋蔵文化財調査センター1999『姫原西遺跡』。
- 24) 山陰においては、弥生時代後期に従来の青銅器祭祀が終了し、新しい祭祀形態が出現する時期であるとされる。その是非を検討するだけの能力は筆者にはないが、興味深い指摘である。
- 25) 大阪文化財センター1987『久宝寺北(その1～3) 本文編』。
- 26) 東大阪市教育委員会2002『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』。
- 27) 長浜市教育委員会2004『神宮寺遺跡(1992年)』。
- 28) 東近江市埋蔵文化財センター2006『能登川町埋蔵文化財調査報告書第61集』。
- 29) 静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『角江遺跡Ⅱ 遺物編2(木製品)』。
- 30) 福井県教育委員会1978『北陸自動車道関係遺跡調査報告書 第15集 上河北遺跡』。
- 31) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2013『下黒田遺跡・下佐野遺跡・諏訪遺跡・葦野町東遺跡・葦野町遺跡・駒方南遺跡発掘調査報告』。
- 32) 石川県埋蔵文化財センター2006『金沢市畝田西遺跡群Ⅳ』。
- 33) 石川県埋蔵文化財センター2006『金沢市梅田B遺跡Ⅲ』。
- 34) 金沢市埋蔵文化財センター2002『大友西遺跡Ⅱ』。
- 35) 金沢市埋蔵文化財センター2012『石川県金沢市 直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』。
- 36) 小松市教育委員会2003『八日市地方遺跡Ⅰ(第一分冊遺物報告編)』。
- 37) 長野県埋蔵文化財センター1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 第3分冊(遺物図版)』。
- 38) 本事例は、古墳時代中期以降の資料であるが、形態的特徴からみて、板状履物の系譜に連なる履物であることから、ここで紹介することにした。
- 39) 東京都北区教育委員会1999『豊島馬場遺跡Ⅱ』。
- 40) SH124は報告書では「方形周溝墓」とされているが、現在では「方形周溝墓」ではなく「周溝を有する建物跡」の可能性が高いことが指摘されている(及川良彦2005「墓と住居の誤謬」梶山林継・山岸良二編『方形周溝墓研究の今』雄山閣)ため、遺構の性格についてはふれないこととした。
- 41) 長生都市文化財センター1993『千葉県茂原市国府関遺跡群』。
- 42) 国府関遺跡では2点出土しているが、これは対(一足)であることから、ここでは1点と数えた。
- 43) 本稿では詳述しないが、田下駄についても同様の傾向がみられる。山陰(鳥取)では弥生時代前期以来、継続的に出土事例が確認されているのに対し、山陽(山口・広島・岡山)では、ほとんど出土事例は確認されていない。板状履物の受容という点において対照的な傾向を示しており、その意義が目される。
- 44) 紐通し孔に対応する位置に舌状の突起がつくものがあり、さらに細分することができる。しかし、事例が少ないため、本稿では分類の基準として採用しないこととした。

- 45) 高橋敦氏のご教示によれば、日本海側では、木製品の用材としてはスギが多いという傾向がみられるとのことである。事実、スギ製の板状履物が出土した青谷上寺地遺跡・姫原西遺跡・八日町地方遺跡は、いずれも日本海沿岸に所在する遺跡である。このため、スギを用材とすることは、地域的な傾向を示している可能性があり、樹種の違いが何に起因するのかは、もう少し検討が必要であるといえる。
- 46) 野毛大塚古墳調査会 1999『野毛大塚古墳』ほか。なお、石製模造品は、外底面にスパイク状の突起をもつものがあるなど、形態的に板状履物と共通する点がみられる。また、分布も近畿・関東に集中するなど、板状履物と共通する傾向がみられ、その関係が注目される。
- 47) 秋田裕毅 2002『下駄』法政大学出版局。
- 48) 本村充保 2015「古代における近畿地方の下駄の様相」『古代文化』第 66 巻第 4 号 古代学協会。
- 49) 本村充保 2011「古代の履物の様相―日韓の履物文化の比較―」『靴の医学』Vol.25 日本靴医学会。
- 50) 王志高 2012「南京顔料坊出土東晋、南朝木屐考」『文物』第 3 期 文物出版社。
- 51) 榎田遺跡では、板状履物と下駄が共伴することが知られている。上河北遺跡を含め、全国で二例しかなく、直ちに両者を結びつけることはできないが、非常に興味深い事例であるといえる。

挿図出典

図 1

- 1：註 8) 文献の第 70 図－ 125
 2：註 9) 文献の第 28 図－ 46
 3：註 10) 文献の Fig189－ W117
 4：註 4) 文献の第 2 図
 5：註 12) 文献の第 33 図－ 124
 6-1・6-2：註 13) 文献の Fig106－ 30124・30125
 7-1～7-3：註 14) 文献の Fig70－ W070～W073 (W072・W073 は図上で接合)
 8：註 15) 文献の第 70 図－ 496
 10：註 17) 文献の第 7 図－ 13
 11-1・11-2：註 19) 文献の図 31－ 103・104
 11-3・11-4：註 19) 文献の図 49－ 43・44
 12：註 20) 文献の図 50－ 150

図 2

- 13：註 21) 文献の挿図 254－ W278
 14-1・14-2：註 22) 文献 3 の第 162 図－ 175・文献 4 の第 273 図－ 184
 15：註 23) 文献の第 130 図－ 4
 16：註 25) 文献の第 164 図－ W5
 17：註 26) 文献の第 131 図－ 47
 18：註 27) 文献の図版 69－ 366
 19：註 28) 文献の第 17 図－ 43
 20-1・20-2：註 29) 文献の第 70 図－ 394・395

図 3

- 21：註 30) 文献の第 61 図－ 8
 22：註 31) 文献の第 89 図－ 419
 23：註 32) 文献の第 258 図－ W244
 24：註 33) 文献の第 48 図－ 260
 25：註 34) 文献の第 167 図－ 6
 26：註 35) 文献の第 70 図－ 28
 27：註 36) 文献の第 331 図－ 3
 28-1～28-3：註 37) 文献の図版 327－ 121～123
 29：註 39) 文献の図第 85－ 64
 30-1・30-2：註 40) 文献の第 191 図－ 482・483

※図 4 については、図 1～3 と重複するので省略する。なお、図は全て再トレースし、一部改変したものがあ